第 10 回研修事業実施内容（記録）
『体感！釧路湿原～理科と社会の視点から～
酪農とタンチョウ保護との共生に向けて②』

≪概要≫

［日程］ 2014 年 6 月 26 日（木）
［参加者］ 12 名（現役教員 9 名）
［講師］ 音成　邦広　氏（タンチョウコミュニティ代表）
［プログラム］

9:23　研修講座開始・開講式（講師紹介、プログラム趣旨・行程説明）
9:31　鶴居村役場駐車場出発、車中でタンチョウに関する基本的な講話
9:50　鶴居村下久著呂コミュニティーセンター到着
9:55　講義「タンチョウの生息環境とタンチョウをとりまく環境」
10:32　下久著呂コミュニティーセンター出発、地区内のタンチョウの観察
11:20　藤原農場見学、農家さんのお話
12:10　下久著呂コミュニティーセンター到着・昼食
13:02　下久著呂コミュニティーセンター出発
13:10　久著呂川（鶴声橋）、渡辺川での生き物調査、講話
14:15　下久著呂コミュニティーセンター到着
14:25　講義「住民にもタンチョウにも暮らしやすい地域社会を目指して
～タンチョウミュ二ティの活動」
15:05　学習資料の紹介等、情報提供
15:15　ふりかえり
15:35　アンケート記入
15:50　下久著呂コミュニティーセンター出発
16:05　鶴居村役場駐車場到着・閉講式
16:07　研修講座終了・解散

≪実施内容（当日記録）≫

■9:23　研修講座開始

〇開講式（富田氏：釧路教育研究センター）

〇研修講座の趣旨説明（渡辺氏：環境省）

自然再生事業の一環として環境教育ワーキンググループを設置しており、釧路湿原を学校教育に活用していただけるように研修を開催している。今日は鶴居村の主要産業である酪農と、湿原やタンチョウ保護との共生をテーマに考えてみたい。

〇プログラムの紹介（山本：北海道環境財団）

■9:31　鶴居村役場駐車場出発

〇タンチョウの基本的な生態（音成氏：タンチョウコミュニティ）

鶴居村だからこそ見ていただける、聞いていただける内容を心がけて、案内していきたい。これから、鶴居村の中では東外れの下久著呂地区に向かい、ご案内していこうと思っている。

私が鶴居村に来たのは､今から 14 年前で、日本野鳥の会という現在は公益財団法人である自然保護団体の職員として鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリに赴任した。野鳥の会職員としては 7 年間、サンクチュアリに勤務していた。基本的にはタンチョウの保護という視点で関わってきたが、その活動を通じて、もう少し鶴居村の地域に根ざした活動をやっていきたいという想いが年々強まってきた。鶴居村で自身の意思として活動を続けようと考え野鳥の会を辞め、現在のタンチョウコミュニティを立ち上げた。タンチョウの保護という視点を持ちつつ、地域に根ざした活動を行ってきた。

今日はタンチョウそのものと､地域の人達とタンチョウとの関わりにも少し焦点を当て、様々な事を感じていただこうと思う。

タンチョウを実際に見たことが無い方でも、その姿、形は思い浮かべられるぐらい、日本では馴染みの深い鳥。よく「タンチョウヅル」という言う方をするが、標準和名では「ヅル」が付かず、「タンチョウ」となる。鶴の仲間で名前に「ツル」が付かないのはタンチョウだけだが、「タンチョウヅル」と言ったら間違いということではない。名前の由来は、「赤い」の「丹（タン）」に「てっぺん」の「頂（チョウ）」で、要は頭が赤いというところからきている。大きさは、翼を広げると 2m 以上になり、イメージとしては大人 2 人が肩を組んで両側で手を広げると、タンチョウが飛んでいるぐらいの大きさになる。日本で最大級の鳥であるが、体重は非常に軽く、およそ 7kg～10kg 程度。かつては北海道全域に生息していたと考えられており、特に江戸時代ぐらいまでは各地に生息していた。当時、最大の生息地は、この釧路湿原ではなく、石狩泥炭地という非常に広大な湿地が広がっていた現在の石狩平野と言われている。その頃は、冬になると暖かい地域である本州に渡って越冬する、いわゆる「渡り」をしており、当時は冬より、むしろ夏の鳥のイメージだった。ただし、人里近くにはあまりいなかったと思われるので、なかなか見る機会は少なかったと思われる。江戸時代までは、高い階級の人々による狩猟の対象であったが、庶民による狩猟は厳しく取り決められていたので、結果的には守られている状況であった。明治時代に入ると、誰もが狩猟ができる状況になり、不老長寿の言い伝えなどもあって、かなりの数が獲られた。特に本州へ渡っている時期にかなり獲られ、数を一気に減らしたと伝えられている。さらに明治時代には北海道各地の湿地が農地化され、子育てをする場所も失われた。おそらく 20 年前後で急激に数を減らし、一時は絶滅したと思われるようになったが、大正時代末期に、この釧路湿原で細々と生き長らえているタンチョウが見つかった。その再発見を機に、タンチョウ保護の機運が高まり、昭和 20 年代に人による給餌が成功したことにより、この給餌活動が各地に

広がり、それに伴いタンチョウの数も増えていった。1952 年にタンチョウの越冬分布調査が始まり、当時の確認数は 33 羽と非常に少なかったが、昨年の調査では 1159 羽が確認されている。60 年余りの非常に短い期間に 30 倍以上に数が増えているということで、数を回復することができたという意味では非常に成功している。鶴居・阿寒・音別・標茶などの釧路管内、或いは根室管内、それら道東域で見られる機会が非常に増えている。しかし、数が増えてきたというプラスの側面と共に、身近すぎるが故の問題も色々と出てきている。現在向かっている下久著呂地区は、すぐ東側に釧路湿原が広がっており、比較的平坦な土地で、酪農地帯である。現在、11 戸が営農している。酪農も最近は非常に大変な時代を迎えており、絶えず国策に翻弄されているという印象がある。そのような中で、おそらく農家の方々も色々なジレンマを感じつつ、また野生動物との軋轢も実感しながら頑張っていらっしゃる。何ができるのか、自身も日々悩みながら試行錯誤の中で活動しているが、今日の研修では、そういった様々な地域の状況を知っていただきながら、有意義な時間を提供できるように努めたい。

■9:50　鶴居村下久著呂コミュニティーセンター到着

〇講義「タンチョウの生息環境とタンチョウをとりまく環境」（9:55～10:22）

タンチョウの生息は湿原のみならず、給餌と不凍河川に支えられている。

タンチョウの生息環境は、春から秋までは湿原で、子育てのシーズンであり、秋が終わる頃から翌春までは人里で冬を越す。特に冬の人里というのは人が餌を与えているということであり、自然の餌は獲れないということ。もう 1 つの重要な要素は不凍河川で、越冬期でも凍らず、ねぐらとして利用できる水域の存在がある。釧路湿原の周辺は丘陵地に囲まれており、丘陵地から流れ込む湧水の水温が非常に高いため、冬場でもそれなりの水温が保たれ凍らない。冬季は単に人間が餌をやれば良いということではなく、タンチョウがねぐらとして利用しやすい不凍河川があるということが生育環境としては必要な条件と考えられる。

地元の子ども達も参加するタンチョウの越冬分布調査によると、1952 年の 33 羽から昨年は 1159 羽というように数が回復してきている。実際にタンチョウの保護・研究をしているグループの調査によると、現在は 1500 羽ぐらいまで回復きてしていると言われており、非常に大きな成果として捉えられている。これを支えてきたのは給餌という、人間による保護活動で、地元の人達が自発的に始めた給餌活動は、1960 年代になると北海道の事業となり、1990 年代の初頭には環境省を中心としたタンチョウの保護増殖事業の一環として事業化された。国の事業では、さらに様々な調査や保護事業が現在も行われている。タンチョウの数が回復してきたことは非常に喜ばしいことではあるが、やはり手放しに喜べないこともある。非常に問題となっているのが生息地の過密化であり、現在その分散化が進められようとしている。生息地には越冬期、繁殖期で状況が異なり、越冬期については、道東域の釧路地域の 3 大給餌場、タンチョウサンクチュアリと鶴居

村の鶴見台、阿寒国際ツルセンターへほとんど集中してしまっているが、他地域への分散が実施、検討されている。繁殖地については、釧路・根室・十勝地方にほぼ集中しているが、他地域で繁殖地に適していそうな環境を調査し、傷病回復個体の移植などが検討されている。種の保護という視点からすると、狭い地域に密集している場合、その地で何か不測の事態が起こると一気に数を減らしてしまう可能性があり、より分散していた方が安全である。

生息数を回復させようという視点から、より良い生息環境を作ろうという視点に移行してきている。非常に重要な視点だとは思うが、私のように鶴居村という小さな地域の中で活動していると、これらの問題だけではなく、もう少しマクロな視点で様々な問題が存在していると痛感している。私自身が大きな問題だと感じていることは、人里・酪農地帯で生息するタンチョウの増加である。基本的には冬場は人里で越冬しているが、春から夏にかけても人里に生息し、酪農地帯に依存して子育てをするタンチョウが非常に増えている。特に顕著な地域が、今日ご覧いただく下久著呂地区である。下久著呂地区は南北に細長い酪農地帯が広がっており、ちょうど縦断するように久著呂川が流れている。基本的には牧草地であり、牛の飼料となるデントコーン畑と農家が点在している典型的な酪農地帯である。周辺を囲む丘陵地の際などには湿地が少し残っており、それらの湿地を利用してタンチョウが営巣している。現在、そこで 12～13 つがいが繁殖している。タンチョウコミュニティの設立以来、ずっとこの地区で月に 1～2 回調査を行っており、7 月～9 月は昆虫の多い牧草地、10 月～11 月は刈り取り後の新鮮な落ち穂のあるデントコーン畑、12 月～6 月までは牛の飼料がある農家の敷地内というように、タンチョウが季節毎に主にどこで過ごしているのかが分かってきた。農家は意図せずともタンチョウに給餌を行っているような状況になっており、タンチョウにとっては季節に応じて色々な環境を利用できる状況であることを理解いただきたい。このような状況が顕著になり始めたのは 90 年代初頭である。この頃はタンチョウの数が 600 羽を超え、生息環境としての湿原が飽和状態にあることが危惧され始めた時期であり、タンチョウによる酪農地帯の利用が増えてきたことと因果関係があると思っている。酪農地帯に適応したこれらのタンチョウを、私は勝手に「新世代タンチョウ」、もしくは「新鶴類」と呼んでいるが、まさに今までの常識を覆し、酪農地帯を利用して子育てをするタンチョウが増えてきている。酪農地帯は人間の経済活動の場であるため、当然のように軋轢が生じる。最も困ることは、農家が播いたデントコーンの種や芽を食べられてしまうことであり、特に若い個体による場合が多い。このような状況が酪農地帯では起こっており、この鶴居村で生活していると目の当たりにする。これらを踏まえ、私自身が非常に問題と思っていることは、生息地の過密化である。しかし、それに対する保護行政と地域住民の意識にギャップがあるということが、問題としてはかなり大きいのではという気がしている。保護行政の側からすると当然のことながらタンチョウの種の保存を考えるため、越冬期の過密化回避が緊急課題である。

しかし、地域住民の側からすると種の保存よりも自分の生活である。越冬期にタンチョウが給餌場へ集まっているという状況は、そこに集まっている分には地域住民自身の生活にほとんど影響は無い。むしろ鶴居村は「鶴居」と言うぐらいなので、タンチョウを見に沢山の人が来る。下手に分散させてタンチョウがいなくなると困る、という人もいる。数の上では繁殖期は 20～30 羽、居てもせいぜい 50 羽ぐらいで、密集具合としては越冬期の比ではないが、その地域住民にもたらす影響というのは非常に大きい。その辺りを地域住民は問題視しているのであって、保護行政側と意識の乖離がある。そのギャップを埋めていくことが、今後、タンチョウ保護におけるこれらの問題を解決していく上でも非常に重要な視点の 1 つだろうと考えている。ただ、行政にできることは限られており、地域住民の想いというのも無視できない。私のような自由に動ける保護団体的な人間が、どう活動していくのかが、これからのポイントとなると考えている。これまでお伝えしてきたことがタンチョウの現状であり、生息環境とそれを取り巻く課題ではないかと思っている。

■10:32　鶴居村下久著呂コミュニティーセンター出発

〇タンチョウの観察

【コッタロ湿原展望台往復】

（タンチョウの食害について）

畑に撒いたデントコーンの種をタンチョウが食べてしまうことが問題となっている。芽が出た後も、芽の長さが 10～15cm ぐらいまでは引き抜き、その下に付いているコーンの粒を食べてしまう。とても深刻な問題である。

（湿原の農地利用）

この辺りは湿地の水を抜いて乾燥化を促し、農地にしていく事業が行われた地区である。事業後一旦は牧草地などの畑になるが、湿原の湧水自体が枯れるわけではないため、結局は 10 年ぐらいで湿地化し、畑として使えなくなる。それをもう一度農地として再整備するために、億単位の国費が投じられ農地防災事業という農水省の事業が 10 年ぐらい前に行われた。

（コッタロ湿原周辺にて）

下久著呂地区から標茶へ抜けていくとコッタロ湿原がある。この湿原は釧路湿原の一部で、特に良い状態が保たれているということから最も厳しい保護の規制がかけられているエリアである。ここではタンチョウが 1 つがい営巣している。湿原の中で営巣しているタンチョウは非常に広い範囲に縄張りを構え、最低でも 1 ヘクタール以上の縄張りをもって子育てをしている。タンチョウが湿原を利用して営巣する理由は、葦の枯れ茎を巣材として巣を作るからで、餌資源からすると、湿原の中よりも酪農地帯などに行った方が、簡単に餌が手に入る。

この辺りの水辺は冬場でも凍らず､おそらくタンチョウも餌を探しに来ていると思う。

釧路湿原でタンチョウが再発見されたというのも、まさにそのような冬場でも凍らない湧水の不凍河川があったからであり、そこに集まってくる魚などを餌として生き長らえていたのだろうと考えられている。コッタロ川は釧路川の支流で、蛇行が美しく、釧路湿原らしい景観が広がっている。このように釧路湿原の非常に良い状態が保たれているエリアが、下久著呂地区のすぐ近くにある。人間側の発想からすると、こうした湿原がタンチョウにとっては非常に良好な繁殖環境であるとされる。しかし、最近のタンチョウの動きを見ていると必ずしもそうではなく、このような環境が彼らにとって本当に過ごしやすいのかどうか、疑問に思えてしまうぐらい酪農地帯に依存している状態にある。国立公園に指定されたおかげで観光資源として湿原が見直されたという側面があるのかもしれないが、人間側からすれば、なかなか使い道の無いこうした環境を残していくことは容易なことではない。このような環境を広げていくということが非常に難しい問題であれば、酪農地帯に住みついているタンチョウ達とどのように上手く付き合っていくか、避けては通れない課題であると思っている。

（参加教員より質問）

湿原は既に飽和状態であるのに、その後も個体数が増え続けているということは、その分、酪農地帯で過ごすタンチョウが増えているということか？

（質問を受けて）

もちろんそうした面はあるが、それだけではない。タンチョウの生態として、雄の個体は自分の生まれ育った地域の周辺で子育てをしたがる傾向があるため、タンチョウの生息地域がなかなか広がらない。しかし、最近では道北のサロベツ原野や道南の鵡川で営巣、繁殖しているパイオニア的なタンチョウも見つかっている。釧路湿原においては、1 つがいが 1ha のなわばりをかまえていたところが、半分の 0.5ha ずつにして繁殖しているというケースもある。全てが酪農地帯に依存していくという訳ではなく、他地域への広がりや縄張りを狭めるというように、色々なものが重なって何とかタンチョウは数を増やしていると理解いただきたい。タンチョウというのはとても適応力の高い鳥だと思う。一般的に適応力の低い鳥は、繁殖地が手狭になった段階で数を増やす事が難しくなっていくが、タンチョウの場合は自ら生息エリアを広げていくなど、環境を変化させることで子孫繁栄を続けており、非常に器用な鳥である。意外にも人に馴れやすく、飼育も非常にしやすい。江戸時代や明治時代には皇族や将軍家が庭園で飼っていたという記録も残っている。

【下久著呂地区内のタンチョウ探索】

（堆肥場のタンチョウについて）

牛はコーンを食べてもそのまま未消化で排泄してしまうものもあるので、堆肥場にいるタンチョウは、そのコーンの粒や堆肥の中にいるミミズや虫を餌としている。

（タンチョウの隠れていそうな場所）

タンチョウは少し暑かったりすると、見つけやすい開けた場所には出て来にくいという一面がある。車で走っていると少し分かりづらいが、牧草地の周辺にある明渠という水路に隠れていることも少なくない。

（群れているタンチョウについて）

タンチョウは、繁殖期はつがいで行動し、縄張りをかまえて行動する。群れているということは、まだ首の部分があまり黒くなっていない若いタンチョウが中心の集団である。

【タンチョウの群れ発見】

（タンチョウについて）

首を上げている状態は警戒をしているか、これからどこかへ飛び立とうとしているかのどちらかである。白と黒がはっきり明確であれば少し歳を重ねている個体であり、何となく薄い感じであったり、白と黒の境目があまりきれいでなかったりするものは、まだ若い個体である。若い個体と言っても、生まれてから 1 年程度は経っている。

（「標識」を付けたタンチョウについて）

足に黄色い物を付けているタンチョウがいるが、あれは個体識別のための番号が付いている標識である。タンチョウ保護研究グループが環境省の事業の一環として、標識の足輪を装着する活動を実施している。生後 1 カ月～1 カ月半ぐらいのヒナに付けられ、その標識の番号から出生地、年齢などが分かる。タンチョウの生態を解き明かすことを目的としているものであるが、写真家には非常に嫌われている。

【堆肥場のタンチョウ】

「掃き溜めに鶴」ではないが、肥溜めのような場所もタンチョウにとっては非常に貴重な餌場となっている。6 月までは農家の敷地内が 1 番利用されているが、農家の敷地以外では確実に餌にありつける状態ではないということ。そのような中で、堆肥場というのは絶えず利用され

ている環境の１つと感じている。

（参加者からの質問）

タンチョウにとって１番の天敵は何か？

（質問を受けて）

大人のタンチョウとなると天敵はほぼいない。ヒナの時にはキツネやカラスが１番怖い。

○藤原農場見学、農家さんのお話

【到着～入口のフリーストール】

藤原さん　乳牛の場合には、穀物と、牧草や干し草を細かく砕いた粗飼料をおおよそ半々の割合で与えている。その粗飼料にコーンが混ざっているため、タンチョウが牛舎の中へ入って行って食べ放題の状態であり、牛を飼っているのか、タンチョウを飼っているのか、分からないような状態である。

講師　私自身も目撃している。今の時期は餌に含まれる穀物の割合も非常に少ないが、タンチョウはそれを狙って来ている。先程、コミュニティーセンターで牛の鼻先でタンチョウが餌を食べている写真をお見せしたが、それがまさにこの藤原農場である。少し近づいたぐらいでは逃げないほど、藤原農場の人達には完全に慣れてしまっている。

藤原さん　一度追い払っても、牛舎に戻って来たら後ろを付いて来ている。有害駆除としてカラスやハトはどんどん鉄砲で撃つが、タンチョウの場合はタンチョウ自身に撃たれないという認識があるため、鉄砲の音を聞いても全く動じない。

参加者から質問　タンチョウがいる所に入植したという感じなのか？

藤原さん　それは違う。人間が入植してきたのは、タンチョウがほとんどいなくなってしまってから。今では 1500 羽近くにまで増え、我々も当初はトウモロコシを植えた畑にタンチョウが来ると感激して喜んだりもしていたが、それは一時のことであり、今ではタンチョウがいることが非常に苦痛になってしまった。タンチョウによる被害は、私達の所だけでも何百万円という状況である。今現在、私達の所には餌用のサイロは無く、餌は TMR センターという工場で作っている。サイロがあった頃には、タンチョウの餌を作っているのか、牛の餌を作っているのか、どちらか分からないような状態だった。

【スラリーにて】

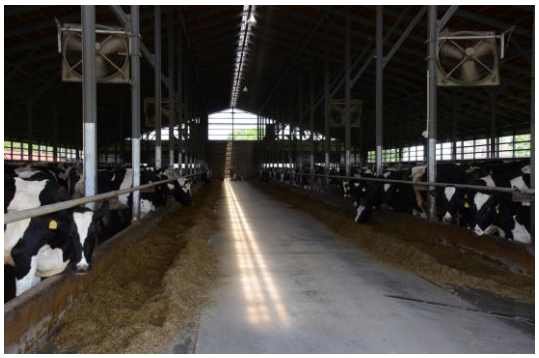
藤原さん　スラリーで溺死したタンチョウがいた。糞尿というのは、糞が上に浮いてきて尿が下に溜まるため、地上と間違えて降りてくるタンチョウがいる。降りた途端に溺れ、溺死してしまった。

参加者からの質問　対策はとっているのか？

藤原さん　今はタンチョウが降りられないよう網目状にロープを張っているが、タンチョウ自身も学習したのだと思う。このスラリーにも 2 羽落ちている。動物園に回収してもらった。

講師　このスラリーはパッと見た感じは湿地のようであり、スズメぐらいの小鳥だと大丈夫でも 10kg 近くあるタンチョウが降りてくると埋まってしまう。2006 年頃から各地でこのような事故が増えてきた。

【メインフリーストールでの話】



藤原さん　現在 150 頭ぐらいいる。牛舎の入口は、開けておくとタンチョウが入ってしまってどうしようもないので、シャッターを閉めている。

参加者からの質問　牛舎に網が張られているのはタンチョウ除けのためか？

藤原さん　カラスやスズメ除けでもある。タンチョウが入ること自体はどうということはないが、糞をされると非常に汚くて困る。この牛舎はフリーストールといい、「牛が自由に歩き回れるスペースがあって、自由に餌が食べられる」という牛舎。

講師　昔のように 1 頭ずつ繋げていたら搾乳に 3、4 時間はかかってしまうが、このフリーストールだと 100 頭以上でも効率よく搾乳でき、2 時間ほどで終わる。ただその反面、開放的な牛舎となったので、タンチョウの側からすると非常に入りやすくなってしまった。会社規模での経営だともっと大規模なところはあるが、鶴居村内で個人経営だと藤原農場は最大規模である。

【畑を見ながらの話】

藤原さん　親牛が食べ残した餌を残滓（ざんし）と言い、その残滓は子牛のところへ持って行くが、そこへ久著呂川や牧草畑からタンチョウが集まって来て、腹一杯食べていく。今、牧草畑ではハーベスターをやっているが、牧草の収穫作業で死んでしまったカエルなどの小さな生き物もそこで食べたりしている。粗飼料の原料となるデントコーン畑には、種を植えたと同時にタンチョウが入って食べてしまう。作付面積の 5～8%は食害にあっていて、かなりの減収となっている。“ツル害”とも言える。

【畑での食害状況の観察】

講師　タンチョウは、畑に敷かれているビニールマルチに開いている穴には種があることを学習している。畑に種を蒔いた時点から食べられ始め、芽が出た後もしばらくは食べられ続ける。

参加者からの質問：タンチョウの食害に対して、有効な対策はとれているのか？

藤原さん　今は村に予算が付いており、その援助を得て、追い払い役のアルバイトを雇うなどしているが、追い払っても戻って来たら後を付いて来るような状態で、何とか良い方法はないかと考えてはいるが限界である。

参加者からの質問　年間の被害額は数百万円と言われていたが、この時点で食べられてしまうのが大きいのか？

藤原さん　ほとんどがこの時期である。電気牧柵を使用していない時はシカとタンチョウによる被害だったが、使用し始めてからはタンチョウだけである。この畑に敷いてあるマルチビニールは 1ha で 100 万円し、この畑は 12ha あるため 120 万円となる。これはビニールだけの金額であり、種代や種を蒔く手間暇などを合せるとかなりの金額となる。音成さんにも去年、一昨年と追い払いをやってもらったが、追い払っても結局は戻って来る。

講師　やっているうちに「負けてられるか！」って気になるが、最終的には負ける。私の

想定ではこの奥に群れがいて、その群れがここを利用しているのではないかと考えている。今年はこの藤原農場に集中したが、この地区全体のことと考えると、何か有効な策はないかと切実に思っている。

【搾乳場前】

講師　先程からもお話ししているが、この藤原農場は大きめの規模の農場だと思ってほしい。搾乳を増やせという国策や、また後継者もいらっしゃるので設備投資をしてやっていらっしゃると思うが、その背景にはこのようなタンチョウなどの野生生物との闘いもあるということを理解いただきたい。

藤原さん　タンチョウはとてもきれいで、優雅な鳥であるけれども、これだけ増えてしまうと非常に苦労している。タンチョウ対策に何か良いアイデアがあれば、いつでも受け付けている。是非とも協力いただきたい。

【コミュニティーセンターへ戻る車内での話】

藤原さんには色々とご協力いただいていて、私自身も大変お世話になっている農家さんである。もちろん、この藤原農場で見聞きしたことが全てではないが、この後、その辺りも含めて皆さんとディスカッションできたらと思っている。藤原農場は現在、従業員も含めて 6 名で経営しており、搾乳している牛は 150 頭と言われていたが、実際に若い牛などを含めると飼養しているのは 300 頭前後であろうと思われる。

■12:10　下久著呂コミュニティーセンターで昼食

■13:02　胴長を着用し、下久著呂コミュニティーセンターをバスで出発

〇久著呂川での活動

【到着～橋上での話】

久著呂川もかつて蛇行河川であったが、大規模な河川改修が行われ直線化した。しかし、このような状況を好む生き物もいる。その最たるが今日のテーマであるタンチョウである。

【川の中で】

橋の上から見ていると割と緩やかな流れのようだが、実際に入ってみると意外に流れが速い。久著呂川は上流から下流にかけてずっと浅瀬が続いており、タンチョウが冬場のねぐらとして非常に利用しやすい環境となっている。湧水が絶えず流れ込んでいる河川ということで､水がきれいであり、水温も年間を通してあまり変わらない。タ

ンチョウの脚の長さは約 60cm で、川の中で寝ると言っても体を浸ける訳ではなく、片足で立ったまま寝ている。川の水深が 60cm より深くなってしまうと羽や身体が濡れてしまうため、ねぐらとしては利用できない。

季節的にまだ水温も低く、魚には隠れ場所が少ない感じではあるので、そんなに魚がいる川ではないのかもしれないが、川底の石の下などには餌となるような生き物は結構いる。昔からこの辺りに入植している農家さんに聞いたところ、河川改修される前の蛇行していた川にはものすごく魚がいたらしく、元々は生き物が豊富な川であったと考えられる。排水路代わりにするために河川改修するという人間の都合によって直線化された結果、生き物としては棲みづらい水辺となってしまった。

○渡辺川での生き物調査

【到着～調査前の話】

鶴見台近くの音羽橋が架かっている雪裡川はタンチョウのねぐらとして非常に有名な場所である。雪裡川は、元は 3 本流れていた川を河川改修によって 1 本に集約し、直線化された。それでも湧水が枯れるわけではないので、周辺にはこの渡辺川のように自然河川のまま元の流れが何となく残っている。

【生き物調査】

【調査後の話】

この渡辺川には色々な生き物が豊富で、特に冬場になるとより集まってくる。タンチョウにとっても餌の獲れる場所として非常に利用しやすく、とても細い川であるが、藤原農場にいたようなタンチョウ達がこの川に来て、魚を探したりしている。本流の方にはヤツメウナギやドジョウもいる。正直、タンチョウはこの酪農地帯のどこにでもおり、この場所じゃなくても良い訳であるが、このように多様な生き物が豊富に獲れる自然環境が残っていることが、ここに数多くのタンチョウが集まってくる大きな要因ではないかと考えている。

■14:15　下久著呂コミュニティーセンター到着

■14:25　講義「住民にもタンチョウにも暮らしやすい地域社会を目指して～タンチョウコミュニティの活動」

今日、皆さんに見学いただいた 1 番の目的は、タンチョウそのものに加え、タンチョウの生息地域で暮らす人々の状況やタンチョウに対する想いを、実際に見聞きしていた

だくことであった。私は日本野鳥の会の職員として活動を始めたが、日本野鳥の会というのは一般的な自然保護団体であり、タンチョウに対して直接的に何かをするということが活動の主な切り口となっていく。私自身がタンチョウコミュニティで行っている活動は、タンチョウに対して直接的にではなく、むしろタンチョウの生息地域の人達に対して何ができるかをテーマに活動しており、地域住民にも、タンチョウにも、暮らしやすい地域社会を目指している。

国が行っているタンチョウの保護事業の大きな柱として、越冬期の給餌活動があるが、タンチョウが再発見された当初は、現在の保護という観点とは少し違い、必然的な地域活動として始められたのだろうと思っている。タンチョウの生息数が 600 羽を超え、繁殖地である湿原がそろそろ飽和状態であろうと言われ始めた頃から、タンチョウの存在はありがたみが薄れ、農家の敷地内での被害の問題が広がり始めるなど、地域住民のタンチョウに対する感覚が少しずつ変化してきた。また、鶴居村内の学校でタンチョウの話をする際に「タンチョウを守ったほうが良いと思うか？」と子ども達によく尋ねるが、ほぼ 100%の割合で「守ったほうが良い」という答えが返ってくる。さらに「なぜ守ったほうが良いと思うのか？」と尋ねると、「特別天然記念物だから」という答えが非常に多い。「守らなければならないから特別天然記念物になった」のであり、「特別天然記念物だから守ったほうが良い」というのは完全な間違いではないが、少しずれているところが気になっている。「タンチョウをなぜ守るのか？」というのは非常に難しい話である。人間側の考え方にもよるが、一般的にはタンチョウだけではなく、タンチョウをシンボルとして多様な生き物達が生息していける環境を作ろうとしている訳であり、そのような環境というのが人間にとっても良い環境であると言われている。しかし、その「タンチョウをなぜ守るのか？」ということが少し揺らいできてしまっているというのが現状としてあり、どのようにもう一度タンチョウに目を向けてもらうのかというところも、我々にとっては 1 つの課題である。

現在、タンチョウコミュニティでは、タンチョウを軸として教育、酪農、観光という分野に上手く関わっていくことを大きなテーマとして掲げている。

教育との関わりとしては、「タンチョウの餌づくりプロジェクト」というタンチョウの餌を作る活動を行っている。給餌に必要な分は北海道や国から支給されており、我々がわざわざ作らなくても十分に足りている訳であるが、皆で餌を作っていくという過程を大事にしている事業であると思っていただきたい。給餌活動は、国や北海道から餌を支給された給餌人と呼ばれる方々が行っており、給餌人以外の地域住民は、地元で行われている活動ではあるが、非常に客観的な出来事として捉えている。そのような関わり方であると、何か問題があった時にも問題意識を持ちづらく、何らかの形でタンチョウと関わりを少しでも作ろうというのが、このプロジェクトの狙いである。農家さんに場所を提供していただき、その場所で地域の子ども達や住民がデントコーンの種蒔きや収穫などの餌作りの作業を行い、出来上がった餌を給餌人の方々に実際に使っていただく。

このような流れの中で、農家さんから地域住民、そして保護活動の最前線にいる給餌人の方々を繋げるというようなイメージの活動である。近年では、地域の活動だけにこだわらず、体験観光の「タンチョウの餌を作りましょう！」という観光メニューで、観光客の方にも関わっていただくということも行っている。この「タンチョウの餌づくりプロジェクト」はタンチョウコミュニティを立ち上げて以来、ずっと行ってきた活動で、教育、酪農、観光という全てを網羅した中で少しずつ時間をかけながら、地域の人達と環境との関わりを深めていこうと考えている。また、タンチョウというものに特にこだわる訳ではなく、自然と村人というものをテーマとして、やりたいことを一緒に相談しながら、皆で体験しようという子ども達のクラブを立ち上げようとしている。

観光との関わりとしては、保護との両立というのはなかなか難しい面もあるが、これからの時代は想いだけで保護の輪を広げていくのは難しくなっていき、地域にとって保護すべき対象を保護することによって、自分自身にも何かしらの恩恵を実感できるような観点が必要となってくるのではないかと思っている。この鶴居村には沢山のタンチョウが生息しており、そのタンチョウを観るためだけに黙っていても大勢の観光客がやって来る。しかし、特に冬場であれば、給餌場に行きさえすれば何百羽というタンチョウが目の前にいる訳で、それを観ればその欲求は満たされてしまい、鶴居村には長居せずに次の観光地へ行ってしまう、というような、典型的な通過型観光となってしまっている。現在でも、大勢の観光客は来てくれている訳であり、そうした人達にどのようなサービスをしていけば良いのかを考える必要がある。鶴居村は酪農体験、フットパス、ホーストレッキングなど、魅力ある観光資源に恵まれており、タンチョウを観に来た観光客に、それらの魅力を伝え、鶴居村にもう少し時間を費やしてもらい、色々な体験をしてもらうことに繋げることが、まずは１つの方法ではないかと考えている。色々な魅力を繋げた観光メニューの作成や企画も少しずつ始めている。

最後に、酪農との関わりについてである。一言で言うならば、タンチョウと酪農との良好な関係づくりということになるが、これはやればやるほど非常に難しいと、今、痛感している。結論から言うと、今現在、私はタンチョウと酪農との良好な関係づくりから少し引いた状態をあえて作っている。その理由は、この問題に対して誰が主体的に取り組むべきなのかを考えた時に、色々な意見に分かれるからである。農家さんはタンチョウの保護関係者に対策を求める。一方、保護関係者側からすれば、それは農家さんとの協働がなければ成り立たないのであるが、農家さんの協力を得ることは難しいのが現状である。保護関係者側に何とかしてもらえれば助かるが、何とかしてもらえないのであれば､農家さん自身で何とかするしかないとまで切羽詰まった問題にはなっていない。このような状態では、我々が協力したとしても、なかなか前に進まない気がしている。「下久著呂地区をタンチョウが生息しづらい環境にすることはできないだろうか」というところから始めなければならない地域全体の問題であるが、農家さん側からすると、そこまでしなければならないような事柄ではない｡農家さんが本気にならない限り､我々

がいくら意見を述べたり、助言をしたりしても、何の動きも生まれない。非常に歯がゆい状況であるが、正直、「保護関係者側に協力してもらって何とかしなければならない」という状況になるまで待つしかないという感じを受けている。タンチョウの生息地域での酪農の現状を色々な方に見ていただき、色々な意見を頂戴するというようなことを、まずはやれるだけやって、少し農家さん側にも色々と考えてもらおうというような、今はそのような立ち位置である。決してこの問題を諦めた訳ではないが、自分なりに考えながらやっているというところである。

お話ししてきたように、教育、観光、酪農と関連づけて地域住民とタンチョウとの良好な関係を作っていこうとしている。そのためにも、「タンチョウがいるということが、地域住民にとっても心から嬉しいと思えるような状態を作っていくためには何をすれば良いのか」という考えの下、色々と思いつたことを試みている感じである。地域住民の方々とふれあい、出会い、共に活動することは、私の活動の活力となっている。教育現場だけではなく、タンチョウが観たい、タンチョウの話が聞きたいという時でも、是非お声がけいただき、今後もまた何か交流をさせていただきたい。

≪質疑応答≫

Q　基本的に給餌活動というのは、冬の間だけなのか。

A　11 月～3 月ということになっている。しかし、それ以外の季節や給餌場以外で餌をやってはいけないという決まり事がある訳ではない。自分で餌を買ってきて蒔くことや真夏に餌を与えることなどを咎めることはできず、そのような場合は「真夏には十分に自然の餌があるので止めてほしい」というようにお願いするしかない。絶対に給餌人以外の人がやってはいけないという話ではないが、安定的に続かなければ意味の無いことである。この辺りは環境省も苦慮している部分だと思う。

Q　デントコーンの植え付けから 1 ヵ月ぐらいの間は給餌していれば､被害は少なくなるのでは。

A　それは過去に試されている。確かに効果はあるが、他のタンチョウをも呼び寄せてしまう恐れがあるなど、なかなか難しい面もある。敷地内にタンチョウが入れなくするというのは不可能であり、ある程度は付き合っていかなければならない。例えば、牛の餌場の解放状態を何とかするなど、タンチョウが利用しづらくなるような対策を考えたほうが良いと思っているが、いずれにせよ、我々が勝手にする訳にはいかないので、農家さんが何とかしようとした時に提案するような感じになるのではと考えている。

Q　農家さんにはタンチョウに対してプラスの感情やイメージはないのか。

A　程度の問題であると思う｡タンチョウの 1 家族が居ついていて雛を連れていたりすると目を細めて喜べているが、藤原農場のように 50 羽ぐらいになってしまったりすると困る。それでもやはり、タンチョウが居てくれることは嬉しいことであり、自分達が守ってきたという誇りなどが根底にはあるため、本質的にはタンチョウに対してプラスの感情やイメージを持っていると思う｡それは非常に嬉しくもあり､難しいところでもある。あくまでも精神的な話であるため、そこに訴えかけていくとした場合、次の後継者達の世代がタンチョウに対してどれだけの想いを持っているのかが少し不安である。想いだけで攻めようとすると全く受け入れられない可能性があるのではと思うと、もっとドラ

イな発想も必要なのではないかとも思っている。

Q　東京ではカラスやハト、スズメまで、徹底的に排除するが、タンチョウが来るぐらいは良いじゃないかというような感覚に、北海道の人の心の広さを感じるが。

A　自然が豊かな地域なので、細かいことを気にしないということも含め、そのような気質はあるかもしれない。農家さんは、基本的には生き物が好きである。心の広さと同じことかもしれないが、やはり自分達がタンチョウをこれまで守ってきたという自負もあり、「タンチョウである」という部分も結構大きいと思う。しかし、その優しさが事を難しくしている面もあると思う。

Q　カラスや他の野鳥からの被害はないのか。

A　被害はある。カラスやハトは駆除の対象として撃ったりしている。カラスや、ハト、シカは駆除することができ、撃つことによって憂さ晴らしもできるが、タンチョウの場合は、それすらもできない。周りの人間からは守れ、守れと言われ、面白くないという部分は当然あると思う。

Q　鶴居村には温泉のイメージがあるが、温泉との関わりはどうなのか。

A　何年か前に、鶴見台という給餌場に来ている観光客を対象にアンケート調査を行ったが、近隣の方々が多いということが非常に印象的であった。温泉に来たついでに寄ってみたという人も多かったが、タンチョウを観に来たけれど温泉の存在は知らないという人も多かったので、テーマとして温泉というのは十分に繋げていけるものだと思う。

Q　温泉に入りながらタンチョウが観られるというのはどうか。

A　観光をテーマとした話になった時、タンチョウの観られる場所を増やそうという話が良く出てくる。自治体全体としてということであれば問題はないが、民間業者の発想となると囲い込み的な話となって儲け主義の道具となってしまい、非常に迷惑な話となりかねない。その辺りは、慎重に考えてやっていかなければ危険ではないかと感じている。現実的には鶴見台やサンクチュアリにタンチョウは来ており、そこに大勢の人が観に行っていることは確かである。改めてタンチョウを観られる場所を作ることが本当に必要なのか、というとことから考えたほうが良いのではないかと、私自身は思っている。

Q　今現在、渡りをしているタンチョウはいるのか。

A　北海道のタンチョウは、渡りはしていないが、大陸にいるタンチョウは大陸の中で渡っている。そのタンチョウが稀に風の影響か何かで日本に飛来するということもある。タンチョウの生息域を分散させるという話からすると、環境省の計画の最終的なイメージとしては本州の方までの渡りを想定していると思う。それにより給餌の必要のない個体も増やしていける。元々は本州まで渡っていた訳であり、タンチョウの保護センターを東北の方へ移していくというようなことに繋がっていけば良いと思っている。タンチョウが本州でも生息できるような環境を残すというような環境保全に繋がるのであれば、「タンチョウを渡らせよう！」というのは１つの案として非常に面白い。

Q　給餌場でカラスなど、他の野鳥との縄張り争いのようなことはないのか。

A　あることはあるが、やはり圧倒的な身体の大きさの差があるため、タンチョウの方が強い。もしくは同居しているというような感じである。

Q　タンチョウが居ることにより、カラスが抑制されているのでは。

A　抑制されている面もあるのかもしれないが、タンチョウが居ることによって餌場ということが分かり、逆に呼び寄せてしまっている面もあるのかもしれない。その良い例がオオハクチョウである。ハクチョウが給餌場にタンチョウの餌を食べに集まってきているが、はっきりとは分からない。

Q　農家さん自身が問題を解決し、上手くやっている事例はないのか。

A　タンチョウに関しては、私自身が知っている限りでは聞いたことはない。ただ、エゾシカに関しては、この地区内は元から野生動物が豊富な地域であるという認識がされていて、柵を張るなど自力で対策している農家さんがいる。「自分自身でやれることはやって、それ以上のことは他に求めない」というスタンスも良いと思う。タンチョウに関しても、「自分達で適当に追い払うから、あなた達は必要ない」と言われたら、我々は出る必要もない。ただし、将来的にはもっと増えてくる可能性もあるため、今のうちから少しずつやっておいたほうが良いのではないかと、私自身は感じている。

■15:05　学習資料の紹介等の情報提供

〇湿原を題材とした学習資料の紹介（山本：北海道環境財団）

〇北海道教育大学附属釧路小学校における実践状況の報告

（境智洋准教授：北海道教育大学釧路校）

〇自然再生への参加機会及び鶴居村釧路湿原流域ガイドマップの紹介等

（渡辺自然保護官：環境省）

■15:15　ふりかえり

A 教員　現在３年生を担当している。小学校の近くに湿原があるということで、生徒達は社会科や総合的な学習の時間に湿原と関わりのある学習している。生徒達は「釧路はツルの街」ということは知っているが、どのようにタンチョウが生息しているかなど、詳しくは知らない。今回ここで知ったことを子ども達に伝えていきたい。テレビ番組で鶴居のタンチョウ追い払いを見たが、機会があればやってみたい。

K 教員　釧路の生まれ育ちだが食害については初めて知った。これを機に生徒に伝えていかなければならないと再認識した。反省も含め、もう一度、授業構成などを考えたいと思う。

M 教員　自然を体験しながらいろんな方と出会って話を聞けたことに感謝したい。釧路の生まれ育ちだが、身近すぎて全く興味が無かった。教師をするようになってから興味を持ち始め、実際に自分自身が体験することにより、生徒達にも体験

させたいと思うようになった。生徒達にも機会があれば、どんどんと取組んでもらいたいと思う。

T 教員　この問題を初めて知った。タンチョウの存在は道東に住む者の誇りのように感じていたが、教育でどのように取り上げていくかと考えた場合、給餌用の餌づくりは非常に良い取り組みかと思う。種を蒔いてから餌を与えるまでというように、タンチョウのことを思っている時間がとても長いので、それを新聞づくりのような活動で行えば継続した取り組みとなるのではと考えている。ただ、野生生物へのエサやり問題との区別を子ども達にどう教えるかは難しい課題で、自身でも整理をしていきたい。

T 教員　東京から北海道に来てまだ 3 年ほどで、当初住んでいた場所でタンチョウのつがいが飛んでいるのを見て驚いた。それを生徒に話したが、全く驚かなかった。東京の人間からすると自分の住んでいる所でタンチョウが飛んでいることは全くあり得ないことであるが、生徒達が自然に意外と鈍感であり、知らないということに驚いている。教師がもっと働きかけ、どんどんと知識も得て、生徒達に積極的に伝えていかなければならないという気がしている。今後、タンチョウの餌づくりのような取り組みにも、取り組んでみたい。

境准教授（北海道教育大学釧路校）　先生方と色々とお話しでき、本当に楽しかった。湿原を活用した教材などが、上手く交流されていって、もっと広まっていってほしいと思っている。これを機会に良い情報交換ができればと思う。

O 教員　生徒達が屈斜路湖や摩周湖のことをあまり知らないが、昔は修学旅行で回ったりして、その道中に湿原を見たりする機会があった。教育が変わったことにより、生徒達が地元のことを知らなくなった面がある。指導内容はカリキュラムによって決まっている部分もあるが、地元の教材で伝えていくことの大切さを感じた。

I 教員　道徳の授業で「釧路の自然で東京の人に自慢するとしたら、どんなものがあるか？」と生徒達に質問したところ、阿寒湖、マリモ、釧路湿原など色々と出てきたが、タンチョウが出てきたのは最後であり、しかもそれを答えたのは福岡からの転校生だった。去年、公共施設や商店など産業に関わる部分が大部分だった総合的な学習の内容を少し変え、自然に関わる内容を 4 年生の授業に加えた。可能であれば、環境省の方に学校へ来てもらい、直接話をしていただきたいと思っている。映像などと併せて直接詳しい人の話が聞ければ、生徒達の感動も違ってくると思う。

渡邊保護官（環境省）　環境省釧路湿原野生生物保護センターでの受け入れや学校での講義も可能なので是非ご相談をいただきたい。

K 教員　タンチョウの生息数が増加したことのプラスの面の話はテレビなどでよく見聞きするが、今日はあまり聞く機会のない食害などのマイナスの面の話を聞けて良かった。驚いたのは、湿原の環境の凄さである。川に少し網を入れただけでも色々な生き物が獲れ、とても興奮した。きっと生徒達が体験したらもっと感動すると思う。実際に体験するなど、リアルな興奮を感じられるような活動があれば、湿原の保護やタンチョウの話などももう少しスト

レートに伝えていけるのではと思っている。

S 教員　教師の授業というのは、1 つの事柄であっても教科で区切ったり、教科書を基にしたりしながら伝えなければならない。教科で区切ったり、教科でのねらいがあることによって見えなくなってしまう部分がある。この講座は教科の関係無しに本物を学ぶことができる。現場に出て、生活者や当事者に直接会い、丸ごと全部を体感できる機会である。また来年も参加したいと思っている。また、私は鶴居村民なので、タンチョウのことも含めた鶴居の自然のことを一村民として色々と考えていかなければならないと感じた。

■15:35～アンケート記入

■15:50　下久著呂コミュニティーセンターをバスで出発

■16:05　鶴居村役場駐車場着・閉講式

■16:07　研修講座終了・解散